

氏 名	堤 圭史郎
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	第5405号
学位授与年月日	平成 21年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学 位 論 文 名	ホームレス問題に関する都市住民の認識と介入
論文審査委員	主 査 教 授 進藤 雄三 副 査 教 授 谷 富夫 副 査 教 授 水内 俊雄

論 文 内 容 の 要 旨

1990年代に都市の寄せ場の「解体」を背景に「ホームレス問題」が社会問題化して以降、その社会学的研究は着実に蓄積された。しかし、そこでの主たる関心は、野宿者の析出メカニズムと、彼／彼女らの生活世界の解明にあり、野宿者を取り巻く人々は分析の遠景に置かれてきた。ホームレス問題は、野宿者の急増・拡散現象とともに、様々な利害をもつ都市住民による問題介入の比重が高まった点に特徴を見出せる。そこでは都市住民の野宿者に対する認識のありようが、野宿者襲撃、施設建設反対運動、もしくは支援活動など様々な行動となって立ち現れている。この様な問題介入は、少なからず行政権力の対応に影響を与えていると思われる。

この様な問題意識の下、本論文は都市住民の野宿者認識とホームレス対策との動態的な関係を実証的に検討し、ホームレス問題の今日的意味について新たな観点からの把握を目指した。

具体的には主に大阪市を対象に、野宿者認識に関する市民意識調査、施設建設反対運動など都市住民の問題介入を示す事例をもとに、野宿者を「救うに値する者／しない者」とに類型化する両義的な対象把握が、ホームレス対策における諸アクター間の社会的相互作用を経た上で、社会的に構成・再生産される過程を実証的に分析した。その結果、都市住民による問題介入が、ホームレス対策を（旧来の寄せ場対策において顕著にみられた、「選別」に基づく「施設収容」に象徴的な）既存の社会体制をより徹底させる方向に水路づけていったことを明らかにしている。

また、こうした知見をより広い地平に位置づけるために、大阪市とは異なった社会状況にある西日本の地方都市Y市の、ボランティア・グループ活動を中核にした「官民協働」のホームレス対策を事例に分析した。その中では、当事者との対面的な相互交渉を積み重ねることにより、両義的な野宿者像を保持する都市住民から、それを一旦脇におき相対化させた上で支援活動を引き出すことが可能であることを明らかにしている。

最後に、ホームレス問題の現代的展開を象徴する「ネットカフェ生活者」のおかれた状況について、生育家族の社会階層的背景に着目し実証的に明らかにした上で、これまでの検討から得られた知見と近年の情勢との関係から示唆される、ホームレス問題における今後の課題を提示した。困難な生活状況を抱える人々の存在形態がより見えにくくなりつつある中で、コンフリクトであれ「善意」に基づいた支援であれ、彼／彼女らと都市住民とが「近接しつつ出会わない」状況が生まれつつある。この様な状況への今後の指針として、多様な人びとの社会的交流の場として寄せ場を再考していくこと、社会と彼／彼女らとが接点をもちうるような場の確保に努めることを提案した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、90年代以降に顕在化したホームレス問題に対する包括的・総合的な社会学的研究である。従来のこの問題に対する研究は、大別してマクロの社会構造的要因に注目した都市下層・労働市場研究と、主に野宿者の生活構造・生活世界という相対的にミクロの実態解明を主眼としたものに分けることができる。政策論的な文脈においても、この研究系列に対応するように、一方における行政側の対応に依拠した研究と、他方で野宿者自身の生活実態に即した研究がなされてきた。本研究の最大の特色は、この問題に対するステーク・ホルダー（利害関係者）でありながら、研究上は不可視化されてきた都市住民の問題認識・表象を明示的に主題化し、ミクロとマクロを架橋する地平を、行政・都市住民・野宿者相互の実証的な動態的相互関係分析のなかで切り開いた点にある。

具体的には、一般公共施設における野宿者居住の顕在化という現実に対して展開された、行政によ

る施策、それに対する野宿者と近隣住民の対応を事例に、そのそれぞれの対応の基底にある「問題」認識・表象を量的・質的データに基づいて明確にするとともに、参加者の主観的表象が制度的枠組みによって規定されつつ、同時に制度自体を改変する可能性を持つことが明示されている。特に、こうした問題の運動論的過程において、「就労自立」の中間施設として構想された「仮設一時避難所」(シェルター)が、現実には「居宅保護」施策として機能した経緯を実証的に明らかにした部分は、都市住民の野宿者認識が制度的枠組みの影響下にありながら、野宿者との相互作用過程において変容し、その変容が行政の施策に反映されてゆく過程の実証的分析として、学術的・実践的双方の観点からも意義深い論述となっている。

また、ホームレス問題への対処の比較という観点からなされた地方都市における事例分析は、主題それ自体が希少性とパイオニア性を持つだけでなく、ボランティア支援型ホームレス対応という一定の類型性を持ちうるものとして提示されている点も評価に値するものといえる。さらに、「ネットカフェ生活者」問題を「ホームレス問題の現代的展開」としてとらえ、把握のきわめて困難な事例を生育家族という観点からとらえた論考は、10 数年にわたるホームレス問題を長期的スパンにおいてとらえようとする著者の視点と問題意識は説得力を備えている。

以上のように、本論文はホームレス問題に対する都市住民の認識と介入という視点から、行政・都市住民・野宿者三者の相互の関連を実証的データに基づいて包括的・動態的に描き出そうとしたものとして、学術的・実践的な評価に値する優れた研究成果であるとみることができる。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士(文学)の学位を授与するに値するものと認められる。